

ウガンダにおける女子児童の家庭環境、月経衛生管理、および教育について

Ms. Hadijah NAKIMWERO (ウガンダ)

ウガンダでは 2007 年以降、初等教育と中等教育の完全普及が実施されており、国内全ての学齢児童・生徒に義務教育を受けさせることになっています。持続可能な開発のための 2030 アジェンダでは、教育が目標項目のひとつとして掲げられています。全部で 17 項目ある持続可能な開発目標のうち、4 番目の項目である「万人への質の高い教育と生涯学習」という目標は、政府から地域コミュニティにいたるまであらゆるアクターに歓迎されています。ウガンダ政府はかなり以前から、学校設備の整備、教科書などの教材の支給、職員の給与の支払いに加え、公立の初等学校と中等学校の全ての男女生徒に対して授業料の無償化を行ってきました。

しかし教育そのものの目標はさておき、全ての女子生徒と男子生徒が公正で質の高い教育を無償で受け、初等・中等教育の課程を修了することにより、その学習の成果が効率的に得られる、といった目的はこの国では達成できないかもしれません。特に農村部においてその達成が危ぶまれるだけでなく、思春期の女子生徒の達成も難しい状況です。なぜなら、月経の衛生的な管理という問題が、彼女たちの前に立ちはだかっているからです。

農村部の人々は、教育が「荒廃してしまっている」と信じています。質の高い教育を施すために必要なものは、全て欠落した状態が続いているからです。農村部の学校には教室が 1~2 部屋しかなく、生徒たちの大半が木陰で学んでいます。また、勤務を希望する教員がいないため、教員の数も足りていません。政府から教員に支払われる給与はわずかなもので、それを補うための親からの寄付金も集まらないからです。このような農村部の学校では、教員のための宿舍や交通手段の提供も行われていません。

こうした教育環境は、特に女子生徒にとってより厳しいのが現状です。このような農村部の学校の多くではラトリンと呼ばれる落とし込み式トイレの数が足りておらず、あったとしてもひどい状態のもので、このトイレは男女共用で、プライバシーを守ることができません。月経中の女子生徒にとってこの状況は非常に辛く、月経が来ると学校を休んだり、それを繰り返すために結果として中退したりする女子生徒も少なくありません。これに加え、多くの学校では手洗いの施設も無く、敷地内に水汲み場さえありません。

月経時の衛生管理の問題が深刻化している原因の一つに、親からのサポートが十分ではないという点があります。この国では文化的に月経についての話をすることがタブー視されているため、親から月経時の対処の仕方を教わらないケースもあるのです。また、貧しくてナプキンを手に入れないため、不衛生な物で代用したり、経血で服を汚してしまって恥ずかしい思いをするぐらいなら家から出ない方が良く考える女子生徒もいます。さらに、男子生徒から月経についてからかわれ、それが原因で学校に行けなくなる場合もあります。多くの男子生徒が月経のことで女子生徒を笑うため、女子生徒は学校に通いたくなくなるのです。

この状況を食い止めるために、政府系・非政府系機関が月経衛生管理についてあらゆる関係者に対して啓発活動を行っており、その対象は当事者である女子生徒にとどまらず、男子生徒、両親、学校管理者、宗教指導者、地域コミュニティにまで及びます。ウガンダの大統領は月経衛生管理の改善に向けて熱心に取り組む必要があります。そのためには、初等・中等学校の設備を充実させ、思春期の女子生徒に生理用ナプキンを支給することで、彼女たちが学校を休んだり中退したりすることなく、質の高い教育や生涯学習を受けられるよう環境を整えることが強く求められているのです。



自分たちで作った洗って再利用できる生理用布ナプキンと
携帯用バッグを見せる初等学校の生徒たち

